

厚い胸板に、みなぎる闘志を秘めて



滋賀県立長浜北星高等学校

水球部

ヨーロッパではプロリーグがあるほど人気の高い水球。しかしながら日本では未だマイナースポーツの域を出ていない。サッカーや野球のように注目されることも少ない中、それでも水球に青春をかける高校生たちがいる。今号では現在、全国高校総体(インターハイ)に13年連続出場を果たしている長浜北星高校水球部を訪ねた。

見どころ満点！水中の格闘技

水球は、一見ただけではその魅力が伝わってこない。プールで行うハンドボールとよく例えられ、パスでボールを繋ぎ、相手ゴールにシュートして得点を競うスポーツである。ここでポイントとなるのが、水中で球技をするということ。実はそこにこそ水球の面白さがあるのだ。縦30メートル、横20メートルをフリールドに、キーパーを含む各チーム7人のプレイヤーが対戦する。1ピリオド賞味8分間の4ピリオド制であるが、得点やファールの際には時計が止まるので、実際の競技時間は1時間近い。

試合は水深2メートル以上のプールで行われる。ということは、足がつかないため常に立ち泳ぎが基本となる。また、攻守に渡って素早い泳ぎも必要で、1試合フル出場(水球では選手交代が何度でも自由に行える)した場合、距離にして2千メートルは泳ぐ。

攻守の切り替えが早く、スピードイナバフスが出る、立ち泳ぎから水上に上半身が出るほど飛び出してのシュートなど、見た目以上にハードである。水の抵抗は決して少なくないからだ。

「水球を一水中の格闘技」と呼ばれるのが激しいコンタクトプレー。ボールを持っている選手に対してぶつかったり、掴んだり、沈めたりというプレーが普通に行われる。反則を取られることも多いが、レフューはプールサイドからジャンプ

ツジをしているため、水中で行われるそれらの行為を見逃してしまう。それゆえ選手には、肉体的にも精神的にもタフさが要求される。これらを踏まえて観戦すれば、水上と水中で繰り広げられる攻防戦に興味を湧いてくるはず。激しいプレーも戦術に基づいていて、それも見どころ。もちろん選手たちの肉体的魅力のひとつにあげられる。鍛え上げられた身体から放たれるシュート

は豪快で、迫力いっぱいだ。トは豪快で、迫力いっぱいだ。

水球部創設35年 全国大会の常連校

水球部が創設されたのは昭和52年4月のことで、長浜商工高校(平成10年に長浜北星高校と校名変更)の時代である。水球部はそれ以前からあったが、前監督の成田新治



練習を見守る藤田悦司監督。自らの選手経験を生かして、コンタクトプレーへの対応の仕方など、細かい部分まで指導を行っている

教諭による水球の指導がその年から始められた。

昭和56年に滋賀県で開催された「びわこ国体」では、長浜市が水球競技の会場となった。この大会で長浜商工高校水球部は全国優勝を果たす。さらに同年のインターハイでも優勝を成し遂げ、一躍全国にその名を知らしめた。

インターハイ出場の切符は、近畿予選大会で3位以上に与えられる。長浜北星高校は現在、13年連続でその切符を手に入れている。創設以来、出場を逃したのは4回のみという常連校だ。

しかし、昭和56年以降は2位が4度あるものの、優勝に手が届いていない。近年は1回戦敗退が続いている。近畿予選においても、かつては優勝して全国大会に進出していたが、ライバル校である京都府代表の鳥羽高校に優勝の座を奪われることが増えた。

現水球部監督の藤田悦司教諭は、水球部を起ち上げた成田教諭の教え子1期生。元水球日本代表

で、ロサンゼルスオリンピック出場経験を持つ。教師としての最初の赴任先が長浜北星高校。その後、長浜北高校に転任したが、「昨年再び母校に戻ってきた。新たに水球部を率いて3年目の春を迎えた。」

伝統を受け継ぎ 全国制覇を目指す

水球部が練習するプールはドーム型の温水プールで、季節を問わず泳ぐことができる。冬場の練習はウエットスーツ着用で行われた時代もあったことを思えば、恵まれた環境にある。

取材時の部員数は3年生が7人、2年生が6人、これに各学年1人の女子マネージャーが加わり15人という構成である。1年生はまだ正式入部しておらず、例年少なくとも5人以上が入ってくるという。長浜スイミングスクールのには、子どもを対象とした水球コースがあり、少年水球チーム「長浜ヨーケルズ」も全国大会の常連として知られる。キャプテンの吉田拓馬さん(3年

生)も、小学校2年生のときにスクールのコーチに誘われて水球を始めたという。



「シュートを決めたときの気持ち良さが、水球を続けて来た最大の理由だ」と言葉少なに語るキャプテンの吉田拓馬さん。



そんな経験者の入部もあるが、初心者も少なくない。中には入部時には25メートルを泳げなかった部員さえいた。「泳ぎは水球にとって重要な要素です。それもスピードとスタミナが求められます。ただ、水球は球技でもあります。戦術面、ゲームメイクに優れた資質も大切

です。泳ぎについては練習次第で身に付いていくものですから」と藤田監督。どちらかと言えば、守り重視のチーム。全員でディフェンスをし、相手の攻撃に耐え、チャンスを確実に得点に結びつける。そのためにも実戦形式の練習を長時間行っており、スタミナアップやパスの精度を上げている。また、全部員がベンチプレス100キロを目標にウエイトトレーニング

を行っている。ウオーミングアップに毎日2千メートル泳ぐという部員たちの身体に、贅肉は見取れぬ。ドーム越しに、降り注ぐ柔らかな陽射しを受けるながら、厳しい練習に励む彼らからは、水球にかける熱い思いが伝わってきた。



迫力満点のシュート練習。思っている以上にスピードがあり、投げ抜いた腕からの水しぶきがゴール裏まで飛んでくる